妹の友だち

　よく僕といっしょにコンビニの深夜シフトに入っている田沼には、自前のオナホに一〇〇円コーヒーを注いでオナニーをする悪癖がある。

　その日も客足の途絶えた深夜三時ごろ、ダスターがけを終わらせた彼はバックに引っ込んだかと思うと、シリコンの塊を手に店内へ戻ってきた。

「またかよ」

「まただよ」

　田沼ははにかむような笑顔でコーヒーサーバーにオナホをセットすると、ホットコーヒーのボタンを押した。コーヒーがドリップされている間に、僕はスマホを取り出してアマゾンで同じオナホを探す。あった。妹の友だちという非貫通式二層型オナホだった。

「カフェインって結晶なんだぜ。知ってたか？　コーヒーを飲むと喉がちょっとイガイガするだろ。あれもカフェインの結晶のせいなんだよ。こうやってから挿入するとブツに結晶が擦れて気持ちいいんだよな。ちょうど人肌くらいにあったまるし。話変わるけどＳＴＡＰ細胞でオナホ作れないのかな？」

　田沼が滔々と語り出したが僕は無視した。

　サーバーから滴り落ちてきた黒褐色の液体が疑似膣口に流れ込む。狭く浅い膣内にはＳサイズ用のコーヒーでさえ入りきらず、溢れて大陰唇を伝い廃棄口へ落ちていく。

　機械がコーヒーを淹れている間に、田沼は商品のカップを一つ取ってきてレジで会計すると、ポッケから百円玉を取り出してお賽銭をそうするようにドロワーへ投げ込んだ。ちゃんとコーヒー代は払わないと気持ちよくシコれないと以前に言っていた。

ディスプレイに「コーヒーが出来上がりました。おいしくお召し上がりください」と表示されたのを確認すると、田沼は膣口から湯気が立っている妹の友達を取り外し、中身を全て捨てる。コーヒーはローション代わりなのだ。溢れたコーヒーで汚れた妹の友達を掃除用の布巾でしっかり拭いた田沼は、雑誌棚の成人向け区画から適当に一冊見繕うとそのままトイレに引きこもってしまった。

一人残された僕は妹の友達の評判をアマゾンレビューで調べた。点数の平均値は五点満点中の四。きつめの締め付けと絡みつくひだに定評はあるが、耐久性に難があるらしく、数回の使用で亀裂が入ったという報告が散見された。二層構造はホールの外装と内装とが剥がれやすく、洗浄する際も注意が必要らしい。『これはま○こです！』『ついに少子化の原因をつきとめました！　こいつです！』概ね好評である。当然ではあるがコーヒーをローション代わりにしているレビューは一つもない。なかなか人気商品らしく、レビューの数は三桁近くあり、妹の友達は今日もどこかで誰かの精を受け止めている。

そうこうしていると、田沼がすっきりした顔でトイレから出てきた。時間にして十分程度。妹の友達が名器なのか、コーヒーの効能なのかはわからないが、なかなかスピーディーな射精である。

　雑誌を元の位置に戻した田沼は、妹の友達を裏返してレジ奥の流し台で自分の精液を洗い流すと、そのままホットスナックのフードショーケースにぶち込んだ。こうすることで妹の友達を速やかに乾燥させることができるのである。

　シフトを三時間残してすでに仕事を終えた顔の田沼は、雑誌棚の裏を掃除する作業に戻っていった。妹の友達はフライドチキンとポテトの間で裏返しになっている。